# （番外編）二人は神の……　無謀な相談

夕雲　橙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

（番外編）二人は神の……　無謀な相談

【Ｎコード】

Ｎ８９７０Ｔ

【作者名】

夕雲　橙

【あらすじ】

連載中の「二人は神の力を　無色の緋」の番外編。コメディーです。

主人公二人が、作中にちらっと出てくるラジオ番組に出演します。ですが性格がぶっ飛んでいる二人なので、脱線ばかりしています。

本作はきちんと更新して完結させますので、ご心配しないで下さい。

決して路線変更とか、投げたのではありません。

## おはようテンション　自己紹介（前書き）

実際にこんなラジオ……深夜ならありそうですね。この辺りのネタならギリギリ大丈夫だと思います。

## おはようテンション　自己紹介

本日『おはようテンション』では、『二人は神の力を　無色の緋』で活躍中のお二人に来て頂きました。
場所は違う世界のどこか。
悪趣味な髑髏を飾る机の上には赤い蝋燭とお葉書。
銀色と黒の棘の生えたマイク。
怪物の口を模した椅子。
その椅子にちょこんと座る、流れるような黒髪、白い肌が浮かぶように目立つ綺麗な女の子。
「はい、皆様から大人気。どうしてもそのお姿、お声を聴きたいと皆がひれ伏す空色（そらいろ）　緋環（ひりん）です。このような場所は初めてですから、途中、アクシデントや不慮の事故、暴言はもちろん放送禁止用語、さらに不快な言葉も出ると思いますけれど、最後までお付き合い下さい、ね」
言葉の最後に甘くささやくように「ね」と耳に残りぞわぞわする声で締めた。

その隣の椅子には胡坐をかいて片肘を突き、隣の発言者を怪訝な顔で見る主人公。
主人公の名は御裏（おとぎうら）　命（みこと）、凄い力を持つが今回はあまり関係ない。
今日はプライベートとあって、露出の多い黒の服を着ている。
ふわふわの髪を指で掻きながら軽く手を上げる。
「あ、俺も自己紹介したい、発言してもいい？」
「嫌よ、そんなのないわ、横暴ね」

反抗するのはいつもなので軽く聞き流す。
「いや、そんなのあるっていうか、横暴でもねえし。ヒリンもうヤバくねえ？」

「どこがよ、今頃皆さんラジオの前でうっとりよ」
「どこから溢れ出すんだよ、その自信は」
「そういう意味ならヤバいわね、あたしに欲情してラジオに変なことしてないかしら。大型ならオプションが沢山あるし耐えられるからいいけれど、小型だとちょっと……お互いに痛いわね」
「おいおい、ちょ、俺の紹介もしてないけれど、これ止めよ、苦情が来そうで怖いから中止」
「と、横の変態さんが想像しています。なかどめ、という注射のように聞こえる既成事実を隠ぺいするような変な単語の意味は、良い子は想像しちゃ駄目よ」
「おおぃ！　中止はちゅうしだろ！　この時点で俺逃げたいよ」
「じゃあ、最後止め？　事前止め？　止め無し？　最後までいったら終わってるよ」
「真顔で聞くか……俺なら……」
「はい、胸がもやもやしたところで時間が勿体ないので、さっそく初めまーす」
御裏が頭を押さえて机に突っ伏した。
「はあー、疲れるよこれ。いっそ放送禁止になってくれ」
空色がマイクの棘で軽く叩く。
「そこ、寝ない」
「いて！　マジでこれ痛い！　誰だよヒリンの前に凶器じゃないのに凶器になるもの置いた奴。周りが危ないって」
「あら、あの方よ」

空色が指差す先には、腕を組んで立つ黒いもやもやする光を発する美形の男。
驚いた御裏が身を乗り出して口を大きく開く。
「うわ、夜叉じゃん。なんで？」
両手を前で組み、御裏にはまず見せない女の子らしい表情で空色が答える。

「さあ？　でも見た目がいいから全てＯＫ。タイムキーパーとか色々してくれるみたいよ」
「ねえねえ夜叉、ヒリンが暴走したら止めてよ」
「む……我はここで見ているのみだ、予定されているセリフもこの一行だ。止められぬ」
「はあー……しかたねえ、俺が一旦まとめるぞ。ヒリン本気で少し黙ってろ」

御裏を凍るような流し眼で見るが、心の底では懐いている空色が真剣なのを察して黙り込んだ。
「よし、このコーナーでは皆様からのお便りやご意見を、俺と空色が答えるからな。答えられない時ははっきり言うからさ、ま、気楽に何でも聞いてくれよ。それじゃ一旦休んでから質問コーナーだ」
御裏が夜叉に目くばせする、夜叉はうなずくとＢＧＭを流す。
地の底から響くような読経が徐々に大きくなり、木魚が連打され、太鼓が後を追うように野太い音を発する。
目をパチパチさせて固まった御裏が、握り拳をゆっくりと上げる。
あれ、珍しく暴力を振るうほどに怒ったのかな？
心配になった空色が、止めようと手を伸ばしかけた。
「グーッド！　いいねこのセンス、やっぱ夜叉は違う！」
一糸乱れず声を合わせ魂を揺さぶる読経の合唱に、御裏は軽く踊りながらうんうんと頷いた。
バカだ、心配して損した。
空色はその手の置き処を考え、再びマイクを握った。
「いてっ！　いてっ！　怖いっ、何してんだヒリン！」
「この胸の高鳴りは何かしら。愛情表現を少し、スパイスのように振り掛けるの」
小さく白い手に握られたマイクが禍々しく映え、薄っすらと浮かべる笑顔は魔女のようであった。

休憩中（戦闘中）です――――次作をお楽しみに。

## おはようテンション　自己紹介（後書き）

作品を読んで頂きありがとうございます。
ご意見、ご感想お待ちしています。

## おはようテンション　おはがきコーナー（前書き）

今日もおはようテンションをご閲覧ありがとうございます。

後ろ書きが、なぜか一番内容が深いです。

## おはようテンション　おはがきコーナー

休憩が終わり、おはようテンションの放送が再開される。
赤いランプが点滅、夜叉が流れるような動きで掲げた手を下ろし、ＢＧＭが流れる。
流れる音楽は日本古来の楽器を多用した、某総本山にて参拾余名を総動員して録音した、文化的に高い価値のある宗教的民謡音楽
「緋環（ひりん）と命（みこと）二人はＳｗｅｅｔ　ｓａｋｅ（みりん）」

棘無しマイクを片手にした御裏が、台本を見てうなずきながら一言目を発する。
「お待たせしました！　本日から始まった新番組おはようテンション――」
空色が何気ない動作で机の上のはがきを拾い上げる。

「はい、一枚目のおはがき」

「――自己紹介も終わりましたよ！　これから二人がお便りに答えるからな。えーと、あ、そうそう、質問や感想は、はがき、メール、ツイッター、番組ホームページから送れるぞ。時間内なら電話も受け付けるぜ――」
「あら、ＰＮ？　何の略かしら……ああ、パートナンバー、製造番号ね」
「――皆ぁ、恥ずかしがらずにどんどん質問よこしてくれよな。俺は君たちの熱い想いを待っている！　採用された方には特製ハートステッカープレゼント！　そんでね、俺は不慣れだけど精一杯答えるから――」
「アルファベットと日本語どちらで読むのかな？　とりあえず日本語で」

「――答えるからって……え、何、もう読んでる？」

はがきにはこう書いてあった。

『ＰＮ・二人は嫁で俺は三人目で告知して。あと、お願いハート下さい』

「製造番号・俺は三人目で・おねがい・あと・告知して・二人は嫁で・ハート下さい……何よこの人、遠まわしに恋愛か家族の悩みを名前を書く箇所に載せたのかしら？　面倒な奴が初めから出たわね、こんなふざけた暗号を送るくらいなら、いいから早く告白するなり認知するなりすればいいわ。じゃあ本文はどうでもいいかな」

空色がへーと呟いてはがきをひっくり返し、本名をしげしげと眺めた。

大慌ての御裏が空色からはがきを奪いとる。

「何で勝手に進めるんだよ！　絶対にわざと間違えて変な読み方したし、しかも今、本名を読もうとしただろ！　それ駄目だから」

「え、だって斜め二行に書いてるから縦に読んだだけよ。そんな事より、リスナーの皆様もきっと私の美声を聞きたくてうずうずしている筈よ、フライングした私に、きっと今頃はラジオの前でお祭り騒ぎだわ……さっきのは本名を確認したんじゃないのよ、本文が難しく書いてあるの。間違えられても嬉しい筈だわ」

「まったくもう、無駄に強気だな……どれどれ、そんなに本文分かりにくいのか？」

「ここ、ほら漢文みたいに四文字だけで。せめてレ点が欲しいわ」

「ふーん、○○○○……本名じゃん」

空色がふーぅと息を吐き、やれやれと手を上げて困ったように頭を振る。

「まったくもう、おばかさん。でも、いつもだからもういいの、私は命を許してあ・げ・る」
「お、おい、嵌めたな？」
「まさかー、勝手に油断して……いいえ、勘違いして読んだの命でしょ」
「う、とにかくはがき出してくれた人ごめん。これ、ドン引きだよ。本当にごめんな、お詫びにハートステッカーに何かおまけして送るから」
　それから御裏が数分間謝り続けた。

「そうそう……おまけといえばね」
　唐突に空色が口を挟む。
「少しはお前もおまけでいいから謝れ」
「あ、私もなの？　うちの命がご迷惑をお掛けして申し訳ありません。存在自体が馬鹿ですけど、私は誠心誠意支えます、必死に生きていますので放送禁止だけは許してあげて下さい」
「むかつく……全面的に俺が悪者かよ」

　そんな事はどうでもいいように、空色がマイクを手元に引き寄せる。
「このはがきの人ね、とりあえず初日だから目立とうとしてこんな書き方したのよ。おまけのステッカーがそんなに欲しいのね……」
　空色が赤く艶のある唇に、薄っすらと色気と怖さを感じさせる笑みを浮かべる。
　ふっと吐息を吐き、甘い声で囁いた。

「……一万枚、これでどう？」

「いや、それはない」
「……なら、二万枚？」

「違う、そんな事じゃないって」
「……全部に命のサインかキスマーク付き。特別に私も一枚だけシークレットで紛れ込ませるわ、必ず二万枚の中から探しなさい」
「また俺か！　二万枚もできるかよ！」
「でも、ハートマークのために全てを投げ打っているわ。苦しそうなペンネームに、読まれなかった本文、さらに本名まで晒して……可哀そうだと思わないの？」
「可哀そうっていうか、どちらかっていうと悪い気が」
「私は全然」
「怒るぞ」
「だから命が責任取るのよ、悪いって自分で言ったわ」
「連帯責任だろうが」
「しかたないわね、私が電話するわ」
「おっ、ひょっとして直接謝るのか？」
「考えがあるの、黙って静かにして」
空色が夜叉から電話の子機を受け取り、スタジオの隅ではがきの番号に掛けた。

真剣な表情で繋がった相手と会話している空色に近づき難く、御裏は全てを任せることにした。
あれでも外面や立ち回りは非常に上手い、何人がそれで騙され、今も幻想を信じているか……
「でも、ラジオ番組で黙って静かにはないなー、この間をどうしろっての。あ、夜叉が適当に好きな音楽流してよ」

暫くして空色が神妙な顔付きで戻ってきた。
無言で電話を夜叉に返すと、困ったように御裏の腕を掴んだ。
「あのね、命……」
「何だ、ひょっとして凄い文句言われたりしたか」
「うん、でね、私謝ったの……やっぱり命とか番組に迷惑かけられ

ないでしょう」
「やったな、偉いぞヒリン」
「そしたらね……最期は向こうが折れたの」
「へー、良かったじゃん」

「うん……もうしませんから許して下さい……って、言われた」

御伽裏はやったな、と笑顔で答えかけて固まった。
「言われたのか？」
「うん……泣いてた……思わずやっちゃた」
空色が小さく舌を出して見上げるようにして、首を軽く傾ける。
「やったよ」
「駄目じゃん！」

ここで時間が終わり、ＣＭに入る。

## おはようテンション　おはがきコーナー（後書き）

前回の後ろ書きで、苦情や嫌だと書かれなかったら続きを書きますとか、作者が載せました。

これを見た、かなり文章を書いているほぼプロのお方が。（多少ご縁のある方です）

「どんな物に載せるにしても、人に見られると分かっているなら見せられないものを書くな。作者に自信がなくて苦情うんぬんとか恐れるから、まだ新人賞も執れないんだ。結局そのレベルだ、ま、余分だから消したほうがいいね～☆」

おおよそこんな感じで叱咤激励されてしまいました。

いや、その通りだと思います。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8970t/

---

（番外編）二人は神の……　無謀な相談

2011年6月15日21時40分発行